

リバースカルチャーショック測定のための評価基準の作成 —大学生の海外留学経験者における調査結果からの検討—

後藤靖宏（北星学園大学）

キーワード：海外留学，リバースカルチャーショック，測定

問題と目的

海外留学から帰国した日本人大学生が経験するリバースカルチャーショックを、客観的に測定するための評価基準を提案することを目的とした。リバースカルチャーショックの定義範囲を、留学先との違いによる一時的なショック、日本の生活への再適応で覚える困難や違和感、帰国後数ヶ月が経過しても頻繁または継続的に起こるような心身症状に関わることとし、さらに、人間関係や将来における目標設定など、大学生活に関する様々な問題をもその対象とした。

方 法

調査1：項目の策定

3ヶ月以上の留学経験を持つ大学生に対し、「帰国後に“日本人”に対して違和感を覚えたか?」等8つの質問に対して自由に記述させた。その結果得られた合計172項目は、概略「日本人への考え方」や「日本の文化や習慣への考え」、あるいは「対人コミュニケーション」といった、7つのカテゴリに分類できることがわかった。

こうした分類を参照しながら、「バーンアウト尺度」等の関連する先行研究から項目を抜粋し、さらに大学生のリバースカルチャーショックを測定する尺度であることを考慮して、「大学生活不安尺度」、「職業未決定尺度」および「進路府決定尺度」からも項目を抜粋した結果、合計261項目が集まった。類似した項目等を整理した結果、最終的に92項目となり、それぞれについて“全く共感しない”を1，“とても共感する”を7として、7段階で評定させる質問紙を作成した。

調査2：留学経験者への質問紙調査の実施

調査対象者 3ヶ月以上の留学経験を持つ大学生および短期大学生77名であった。

手続き 調査1で作成した質問紙を用い、個人あるいは集団で回答させた。個人回答者には Web

上での回答者も含まれていた。回答に際しては、調査時の一時的な考えではなく、帰国後からその時までの考えを総合的に評価するよう指示した。

結果と考察

評定値の項目平均値が極端に低いものや相関が高いものを除いた49項目について因子分析を行った結果、4因子が集出された（Table 1）。累積寄与率は41.54%であった。

Table 1 抽出された4因子と α 係数

項目	α 係数
日本人の気質に対する反発(第1因子)	.860
留学先の文化へのこだわり(第2因子)	.785
日本の文化・習慣に対する違和感(第3因子)	.734
卒業後の進路決定に対する不安(第4因子)	.758

第1因子は正確性や几帳面さといった日本人の気質やコミュニケーションスタイルに冠するものであり、大学生を含んだ一般的な留学経験者が感じるものだと考えられる。これは第3因子にも共通して言えることであり、自国の文化とは異なる文化に適応し、その文化の価値観や習慣が当たり前と感じるようになった者ならではの観点と考えられる。また、第2因子には留学先での生活を懐かしみ、留学経験によって得た能力や記憶を失いたくないという願望も含まれているようである。これらの3つの構成要素は、留学経験者は、留学先で身につけた価値観や振舞い方が、日本では必ずしも通用しないと感じていると考えられる。

一方、第4因子は大学生留学経験者という本研究に特有のものであろう。特に語学力は進路選択に大きく影響していると読み取ることが出来る。

本研究結果を実際に活用することで、帰国後の自身の状態を把握したり、これから留学する学生の心身状況を予測したり、あるいは、大学が留学生を受け入れる際のサポートに有用である。そのためには、調査対象者をより多様化させ、今回の結果を精査していく必要があろう、